

## I 要約型記述課題①

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

# サンプル

新聞、雑誌、とくに新聞には、読者の意見をのせるページ、スペースがあるのは、日本も欧米も変わりがないが、①その重要さにはかなりの差があるように思われる。日本ではこういうページを熱心に読む人はあまり多くないのではなかろうかと思われる。投書をするのも、したがって、あまり一般的ではない。日本の新聞の投書にはたいてい筆者の年齢がついているが、それによると、ごく若い高校生から大学生の層と60歳以上の年配の層にかたまっていて、社会で活動している世代が、仕事に多忙で投書をしているひまがないのかもしれないが、欠落していて、すっぽり穴があいた感じである。そればかりではあるまいが、それも手伝って、これまで、読者欄はそれほど重視されなってきた。

そうは言っても、最近、二昔、三昔前に比べるとずいぶん内容が充実している。ときにはほかでは見られない新鮮な文章があつて、はっとさせられることがある。読者欄はたしかに変わってきている。注目する読者もふえているに違いない。いつかタクシーの運転手の寄せた文章に、信号がまだ青で、急いで渡れば渡れるのに、ひとりの小学生らしい少女が渡ろうとせず次の青を待った、さぞいい家庭の子なのだろう、と想像したとあつた。日ごろあたふた走って横断しようとしている自分がかえりみられて、恥ずかしくなったことを覚えている。そういうのにときどき出会うと投書欄のファンになる。

外国の新聞、雑誌の同種のページは、よくなったいまの日本の投書欄と比較してもはるかに重視され、よく読まれている。中にはこれをまっ先に読む読者もあるらしい。そのせいかどうかは別として、日本の雑誌ではたいてい終りのごたごたしたところにおかれている読者のページを、いちばん前にすえている英語の雑誌もある。日本の新聞では、読者からの手紙やはがきを掲載しているページ、スペースの呼び方が一定していない。A紙は「声」、B紙は「みんなの広場」、C紙は「読者のページ」、D誌は「談話室」、E紙は「発言」である。ひとつとして同じのがない。なんでも共同歩調をとる日本の新聞としては珍しい。おもしろいのは、読者のページをもっていない新聞のあることで、それほどまでに読者の関心が高くないことを物語っていると見てよいであろう。英語では‘Letters to Editor’ というのが一般的である。「編集長への手紙」の意味であるが、②日本の新聞でこのことばがついに定着しなかった。

‘Letters to Editor’ は「投稿」ではない。すくなくとも形式上は、the Editor に宛てた手紙である。書簡の形式をふんで、Dear sir など始まる。結尾も手紙の形をしている。その相手がthe Editor であるのははっきりしている。日本の新聞雑誌の読者欄のページへ意見を書き送る人が何としているかわからないが、編集主幹などには宛てない。A紙なら「声」係御中、として出すのではあるまいか。はがきが多いと思われるが、普通の手紙、はがきのような形をとることはすくない。(中略)

日本の投書は宛先がはっきりしていないだけでなく、だれに向かつて書かれているのかも明確でないことが多い。天下国家を論じる文章がすくなくないけれども、多くはいわば独自の。話しかける調子ではないから、空論のような感じを与えがちだ。しかも結びの部分へ来て、「こういう事態を放置することは断じて許されない」だの「国は早急に対策を考える必要がある」といっ

た論説のようなことばがとびだしてくるのでは、一般の読者にはどうすることもできないので、ただ叱られているような印象を受ける。読者が反応できるような形にはなっていない。これは読まれなくてもしかたがない。

サンプル

英語などヨーロッパ語においては、ワレとナンジの関係はこういう読者の書く文章においてもすっかり根をおろしている。何々御中などというあいまいな扱いはしないで、ひとりしかいない the Editor に宛てる。記事に言及するときにはただ ‘the article’ とするのではなく ‘your article’ となる。新聞雑誌自身の意見、記事や文章に対する批判や反論もすくなくないが、それを新聞や雑誌が実にいさぎよくのせるのである。逆に新聞や雑誌をへたにもちあげたような ‘Letter’ はのせないのがたしなみとされている。外国の読者は the Editor に対して考えをのべているのだから ‘Letter’ と呼ぶのは自然である。相手のはっきりしない日本の投書が ‘Letter to the Editor’ の形をとることが難しく、それに対応することばもついに生まれなかったのは不思議ではなからう。

(外山 滋比古「英語の発想・日本語の発想」NHKブックス)

## 設問

### 問 1

傍線部①——「その重要さにはかなりの差があるように思われる。」とあるが、日本と欧米にはどのような差があると筆者は述べているか、60 字以内で説明しなさい。

### 問 2

傍線部②——「日本の新聞でこのことばがついに定着しなかった。」とあるが、なぜ ‘Letter to the Editor’ ということばが日本の新聞で定着しなかったと筆者は述べているか、日本と欧米の新聞雑誌を比べながら 100 字以内で説明しなさい。

## I 要約型記述課題②

# サンプル

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本では、温暖化は世界全体の関心事で、各国が温暖化を重要問題視していると信じています。しかし、これは日本国内だけの錯覚であって、事実ではありません。

京都議定書で削減に署名したのは、日本、アメリカ、カナダ、EUで、ほかの国は署名していません。ロシアは表面上0パーセントですが、旧ソ連からロシアに変わって実質は38パーセントの増加枠を獲得していますから、これを削減とはいえません。

その後アメリカは批准せず、カナダは離脱し、さらに、1990年を計算基準にすることでドイツは11パーセント、イギリスは5パーセントの増加枠を獲得したのですから、実質的に削減を課せられているのは、ほとんど日本だけという状況になってしまいました。

国際関係で「優等生」になろうとしている日本は特別で、世界のおもな国々では「自国や自国民の利益を最優先する」という考え方が強いのです。

ドイツでは、フランス国境に工業地帯を集め、フランスからの原子力発電で工場を運転し、また、ロシアからの天然ガスのパイプラインを整備しています。さらに、各家庭で使う小規模電力は、風力や太陽電池などを利用して、エネルギーの依存を多様化しようと努めています。

しかし、日本は四方が海ですから、隣国の原子力発電や天然ガスを頼りにすることはできません。ドイツの風はドイツにしか吹かず、環境とは風土であり、ヨーロッパと日本では、それがあまりに違うのです。

ところで私は、ヨーロッパの会議に行くと、現地の人々に「なぜ温暖化が問題なのですか？」と尋ねてみます。しかし、その質問に「環境を守るため」と答える人はほとんどいません。みんな一様に「それは政治問題ですから」と言うのです。

日本人の多くは温暖化を環境問題だと思っています。しかし、ヨーロッパ人にとって、温暖化は政治問題であり、環境問題ではないようです。

ヨーロッパが温暖化とCO<sub>2</sub>を関連づけて、まだ実害がない「科学の衣を着た環境問題」を持ち出して世界的な規制を行うのは、これから開発を進めるべきアジアやアフリカの国々の規制に乗り出すことにほかならないのです。

もし、京都議定書が当初の目的どおり発展途上国も含めた全世界でのCO<sub>2</sub>排出量の制限を達成していれば、ヨーロッパはすでに大成功を収めていたでしょう。

世界の国が一律に、1990年を基準にして6パーセントのCO<sub>2</sub>削減で合意したとすると、ヨーロッパ以外の先進国であるアメリカ、日本、カナダなども大打撃を受け、中国、インドも、せっかく経済発展の可能性が出てきたのに、それを摘み取られる結果になったことは間違いないのです。

京都会議が始まる時、ヨーロッパはどのような理由があって温暖化問題に力を入れているのだろうか、という議論は日本ではまったくありませんでした。そればかりか、温暖化というのはほんとうだろうか、その原因はCO<sub>2</sub>なのだろうか、という議論すらなかったのです。

物事の一面だけをとらえるのは、環境学的にも国際政治学的にも落第であるのは言うまでもありません。とくに、京都議定書のような国家の発展を左右するような問題においてさえ、ほとんど議論をつくさないまま「CO<sub>2</sub>を削減し、節約が第一です」と、日本は大合唱を始めたのです。

ヨーロッパが温暖化問題に熱心に取り組むもう一つの理由は、その影響を地球上でいちばん大きく受けるのが自分たちだという心配があるからです。

サンプル

ヨーロッパは、地球全体から見るとかなり北のはずれにあり、緯度でいえば北海道よりも高いのですが、その生活が気候的に快適なのは、メキシコ暖流が西の脇を流れているからです。しかし、このメキシコ暖流の動きは複雑で、ちょっとした気候の変化、たとえば温暖化でグリーンランドの氷が解けると、あまり北上しなくなり、途中で折り返すような流れになることが予想されています。これは、ヨーロッパの寒冷化を意味します。

もともと、人が住めなくなるほどの寒冷化が急激に起こることはないでしょう。中世の温暖期にノルマンのような北方民族が大いに活動したことを考えると、北方も暖かかったのでしょうか、その後、ヨーロッパが寒冷な気候になるまでに600年ほど経っています。この間、ヨーロッパは人間が住めないほどの気候になったという記録はありません。

いずれにしても、日本のように温帯地方で四方を海で囲まれている国が、ヨーロッパと歩調をあわせて温暖化を問題とするのは、あまり意味のないことだと思います。

(武田 邦彦『日本人はなぜ環境問題にだまされるのか』PHP新書)

## 設問

### 問い1

傍線部、「ヨーロッパはどのような理由があって温暖化問題に力を入れているのだろうか、という議論は日本ではまったくありませんでした」とあるが、ヨーロッパが温暖化に力を入れている理由は何だと筆者は述べているか、60字以内で述べなさい。

### 問い2

筆者は日本の現在の温暖化に対する考え方についてどのように述べているか。日本とヨーロッパを比べながら、90字以内で述べなさい。

## I 要約型記述課題③

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

# サンプル

ずっとむかしから、ぼくは哲学というものについて、こんなふうを考えていた。哲学とは何か？という問いは、ほんとうは重要な問いではないだろう。もし、だれもが哲学をしなくちゃいけないときまっているなら、哲学とは何か？ は、たしかに重大な問題になるだろう（ちょうど、だれもが道徳的に善くあらねばならない、と考えられているなら、道徳的に善いとはどういうことか、という問いが重要な意味を持つと同じように）。でも、哲学をしなくちゃいけないなんてことはぜんぜんないのだから、哲学の本質が何であったとしても、だからといってひとがその定義に従って何かしなくちゃいけない理由が生じるわけではない。

すべてはただ、それぞれの人に考えぬいてみたい問題があるかどうか、につきる。もしあるなら、それを考えればいいし、考えるべきだ。いま、それを〈哲学〉と呼ぶとすれば、それが世の中で認められている「哲学」の概念と一致するかどうかなんて、ぜんぜんどうでもいいことであるはずだ。そんなことは他人（たとえば「哲学者」の集団）が決めることだ。そして、当人にとってどんなに重要な問いでも「哲学」と認められるとは限らないし、それどころか、他人にとってはぜんぜん意味のない問いであることだってよくあることだ。でも、それでいいのだ。そうであるのがあたりまえなのだ。

そもそも、問いが世の中で意味のある問いとして認められるかどうかは、問いの価値とは関係ない。たまたま、人間精神に起こりがちな問いであったなら、それはすでにだれかが考えていて、いくつもの答案が用意されているだろう。また、人間精神におこりがちな問いではあるが、何らかの事情でこれまで伏せられてきた問いなら、みんなに受け入れられる問いとなるだろう。でも、たまたま他の人々があまり持たないような問いであったなら、それはまったく世の中では認知されずに終わるだろう。それでいいのだ。自分が自分の世界と自分の生を自分の仕方と理解することができたなら、それだけでいいのだ。むしろ、それだけであるほうがほんとうなのだ。

人々に受け入れられることはもちろんだが、歴史の評価にたえて生き残ることでさえ、哲学の価値とは関係ない、とぼくは思っている。むしろ、逆ではないだろうか。歴史の評価でさえ、見えない通俗性の、つまり、問いになお見えない上げ底があることの、しるしではないだろうか。もし問いがまったく独自の（自分ひとりの）ものであれば、それはだれにも通じないだろうし、「哲学」との接点もないだろう。それでもかまわないのだ。

だから〈哲学〉は、それをした人の死とともに消滅していいのだ。それがまわりの人々に影響を与えるかどうか、あるいは「哲学」として永遠に世に記憶されたりするかどうかは、ひとに伝えたいと願う程度や宣伝効果や、そしてまた、問いがどの程度にありふれていてどの程度に新鮮であるかのころあいが、つまり通俗性と新奇さのバランスが、決めるのであって、〈哲学〉そのものの価値とは関係ない。

それでもやはり、みんなに理解してもらえるような議論として整える努力は必要だ。なぜなら、それが自分に理解できるための条件でもあるし、また単なる世界観や人生観とは異なる哲学の真骨頂でもあるからだ。

（永井 均『〈子ども〉のための哲学』講談社現代新書）

設問

# サンプル

問 1

傍線部、「哲学とは何か？」という問いは、ほんとうは重要な問いではないだろう。」とあるが、なぜ重要ではないと筆者は述べているか、60字以内で述べなさい。

問 2

筆者は「哲学」と〈哲学〉を区別しているが、〈哲学〉の価値についてどのように述べているか、150字以内で述べなさい。

## I 要約型記述課題④

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

# サンプル

さて、日本の高度成長とともに急激に伸びてきた穀物需要だが、穀物市場の視点からみると、日本のこの需要の伸びはシカゴの穀物市場関係者にとっては意外な材料ではなく、年々の相場にとってはすでに折込済みの材料であり、日本の輸入が好感されて買い材料にされて穀物相場を押し上げるということはなかった。増えて当たり前のときはインパクトにはならない。相場というものは不測の問題が発生したときや、予想しなかったものが突如飛び込んできたときに反応していく。

今後の日本の場合、需要が減るという局面で自然的減少するのではなく、ネガティブな材料が出てくると反応がでてくる。たとえば不況が予測以上に突然に悪化して、穀物消費が急速にダウンすることになるとか、日本の狂牛病（BSE）事件や口蹄疫の問題が深刻化すると、日本の畜産への打撃として、飼料穀物輸入の急激な減少が見込まれた場合、相場に大きなインパクトを与えると思われる。

これまで政府は自給率低下については、政策的に手をつけていたとは言い難い。国民の食生活の流れに任せていた。ただ、生産者である農家に対しては米価と減反補助の両刀で保護してきた。反面、意欲的な米の生産者にとっては生産拡大できず、厳しい時代が続いた。

とくに自給率向上に向けて規制しようというルールはないが、一応、自給率引き上げの目標を掲げて政策的に何とかしようとする米食振興など啓発運動が出て、その試みがスタートしている。しかし、果たして達成できるかどうか。国民ひとりひとりの食生活が今後どのように変わっていくかすべてがかかっている。

ここまで自給率が低下した原因は、単純に高度経済成長の結果論だけではなく、食生活の変化が高度成長を支えたという側面も忘れてはならない。流通などの中間業者をはじめ食品メーカー、あるいは外食産業、その中間で、中食と呼ばれるコンビニなどでの総菜類の提供者、こういう業界の人たちが日本人の食生活の方向変化に大きく働いた。また、核家族化により食生活も変化してきた。核家族ではなくとも家族全員で食事をすることが少なくなり、個食の時代ともいわれるようになった。家族の共同体意識がより薄れる方向にこれらの産業は機能してきたともいえるのである。

これらの複雑な要因が、重なった自給率を一気に引き上げることは不可能に思われる。しかし、その一つのヒントが欧州での自給率を回復した要因となった価格である。価格のメリットが農家の増産意欲をかきたてて自給率は向上したが、日本の場合は価格が高いがゆえに消費者は国内産を買わないという逆の現象である。したがって国内産価格を下げる方向の、消費者のメリットを考える政策が必要になってくる。

すなわち、お米を保護しているから高くなっていることに異論をはさむ人はいない。市場原理を導入すれば、価格的に安くて良い物ができるはずである。単収の低い農地で質の低い米も単収の高い農地で高質の米も減反すれば、補助金その他も同じように支給される。とにかく平均ですべてのことを処理しようとする農業行政のぬるま湯に浸っている人もいれば、これじゃいかんとおもいながらもぬるま湯に浸らざるを得ない人も出てくるわけである。

意欲的な生産農家を増やすためにも、市場価格に敏感になりながら、どん欲に生産するようなアメリカの農家のタイプが活躍できる農業が、そろそろ日本でも必要になってきているといえる。弱肉強食との批判が予想されるが、ある程度覚悟しながらそういうものを整理していく時期に来ている。さもなければ日本の農業は消費者からも見放され、国家財政の負担減の流れとともに農業そのものが淘汰されてしまう。

（江藤 隆司『「トウモロコシ」から読む世界経済』光文社新書）一部編集

## 設問

### 問い1

傍線部、「相場に大きなインパクトを与えると思われる」とあるが、どのようなときに相場に大きなインパクトを与えると筆者は述べているか、50字以内で述べなさい。

サンプル

### 問い2

筆者は、日本の自給率を上げるためにはどうしたらよいと述べているか、90字以内で述べなさい。

## I 要約型記述課題⑤

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

# サンプル

オリエントといえば東洋のことで、オクシデントといえば西欧のことと思うかもしれませんが。またオリエントというと、日本では中東地域のことを指すのが一般でしょうか。オリエント学会といえば、中東の古い文明や文化の研究をする学会のことです。しかし、ここでいま私が取り上げるオリエンタリズムとは、必ずしもこうした意味のことではありません。

一九七八年に、アメリカのコロンビア大学教授エドワード・サイードが『オリエンタリズム』という本を書きました。サイードはパレスチナ人で、エジプトなどで教育を受けた後アメリカに行き、ハーバード大学やプリンストン大学で学位をとり、アメリカの大学で比較文学の教授として成功し、非常に大きな声望を得ています。

彼の『オリエンタリズム』が発刊されて以来、オリエント主義、つまりオリエンタリズムという言葉は、現代を解くための一種のキーワードになりました。

というのも、その本は、西欧を中心とした世界が、オリエントすなわち、中東地域をどう見てきたか、特に近代における西ヨーロッパが中東地域をどう見てきたかということ进行分析したのですが、その中でサイードは、中東に対する偏見や誤解を植えつける以外のなにものでもなかったと言っているのです。

つまり、西欧人がいろいろな形で中東に対して関心を持ったけれど、それは中東の現実とは違って、西欧人が勝手に決めつけたものでしかない。たとえば『アラビアン・ナイト』などに代表されるような世界が、西欧では好奇心の対象にされてしまうとか、オリエントに対する植民地的な関心がみるがゆえに、オリエントを従属的に描くとか、また、極端に性的なイメージで描くといったことがあります。フローベールなど西欧の有名な文学者の作品の中でも、こうしたことが誇張されたオリエントとして描かれ、実際のオリエントとはまったく違ったイメージがそこに吹き込まれ、西欧人の表象の中で勝手に動き、増大してしまっただけというのです。

サイードは、こうした西欧におけるオリエントに対するさまざまな言語を分析して、それを西欧から見たオリエントに対する偏見として位置づけました。

その偏見は西欧がオリエントを植民地的な従属状態においておくために、オリエントの現実とは関係なくそれにかぶせたイメージ、言説である、とサイードは言っています。言説というのは一つの権力にもなりますから、それが一人歩きして、現在のアメリカなどのアラブ政策にもそれが現れているのだとも書いています。

基本的にサイードは、中東地域に対する西欧の言説に表れた偏見とか、現実無視の侮蔑的な表現とか、異文化としてのオリエントの捉え方に見られる偏向を、政治、経済的な利害関係も含めて分析しているわけです。

アメリカでイスラームに関する報道がいかにかゆがめられているかということ进行分析した著作『イスラーム報道』も彼は書いていますが、いずれにしても、イスラームというのは、原理主義とか、テロリズムとか、そういう否定的な要素だけでしか捉えられていない。それは西欧世界に対する敵としての位置づけともいえます。現在でも、たとえばトルコはEU(欧州連合)入りを望んでいますが、候補国としては認められたものの実際にはEUになかなか入れないというのもイスラームだからだ

とか、公然と西欧の人は言わないけれども、イスラームに対する偏見があるから一緒に扱わないのだと言うトルコ人は少なくありません。それはある程度あたっているかもしれませんが、隣国のギリシアはすでに EU に加入しています。

78年にこの『オリエンタリズム』が出てからというもの、オリエンタリズムという言葉は、オリエント地域、中東地域に対する蔑みや偏見を示す言葉にもなりました。またオリエントという言葉を使うのは一種のタブーになって、四～五年に一回開催される伝統ある国際学会「世界オリエント学会」というのがあったのですが、それが「アジア及び北アフリカ学会」と名称を変えてしまいました。そのくらいインパクトがあったのです。オリエンタリズムという言葉は、トマス・クーンの「パラダイム」という言葉と同じような効果と学問的文化的な常用語化をもたらしたといってもよいかと思います。(中略)

現在よく用いられる「オリエンタリズム」という言葉は、これまで述べたような経緯で出てきたわけですがけれども、これをもう少し拡大してみると、この言葉は異文化に対する偏見というものの総称としても使えると私は思うのです。つまり、政治的、経済的、あるいは文化的に優位に立った社会や国が、異なると見なされる劣位にある文化や社会を見て、それを一種の蔑みの対象とするときに、異文化に対するオリエンタリズム的態度が現われるというふうに使えようと思うのです。

その意味でいえば、近代日本におけるアジアの扱いは、極端に言えば実にオリエンタリズム的です。先にも指摘しましたが、日本から見てアジアとアジア文化がいかに劣ったものであるのかという見方は、現在でも依然として消えていません。

たとえば、近代の日本人にとって韓国文化は好奇心の対象にはなってもまともな異文化として理解の対象にはならなかったということがあります。逆に、これまで韓国は文化政策で日本の現代文化の流入を防いできたわけですが、これは被植民地の体験もあって、反日運動の一つの形として、行われている面もあるわけです。しかし、韓国人から見れば日本文化の多くの要素は朝鮮半島から渡っていったものではないのかという見方があるわけです。中国文化の影響下にあるとはいえ韓国人たちは、たとえば儒教でも、中国よりも正統的な儒教を受け継いでいるという自負があると聞いたことがあります。自文化への誇りが高く、それが異文化に反映されます。そこには日韓の不幸な歴史が反映されているわけです。こういう面を日本人はなかなか理解しようとしません。

アフリカは「暗黒大陸」といわれていました。ところが、アフリカのサバンナでは太陽は輝き、暗黒のイメージの反対です。それなのに「暗黒」ということは、完全にオリエンタリズム的な立場で見ているわけです。アフリカのことをいろいろと調べてみれば、すばらしい世界があるという人もたくさん出てくるし、自然もすばらしい、人間もなかなか立派な人がいて、独自の文化もある、ということがだんだんわかってくるのですが、やはり十把一絡げで「暗黒」となるのです。

ヨーロッパ人が「暗黒」と言ったのは、彼らから見て、地図もできていないアフリカはヨーロッパ人にとって未知の世界だという意味なのであって、べつにアフリカが暗いといっているわけではないのですが、「暗黒」と言われると、これは非常に劣った、人間の住めるところではない、というイメージになってしまうわけです。

異文化に対する無知と無理解の上に立って初めから自文化優位で、異文化を見下すような態度は、今日でも世界を覆う非常に強い傾向ではないでしょうか。憧れと軽蔑、理想化と侮蔑が同居しているというのが、異文化へのアプローチの複雑なところですよ。

オリエンタリズムは、とくに近代世界の中で、いろいろな形で現れてきました。近代化の達成という点では、達成の度合いが非常に高いところと低いところというような差がはっきりと見られます。

そこに差別や軽蔑を生む原因があるのです。

日本人はそうした「基準」をすぐ当てはめて異文化を見てしまう傾向をもっています。すぐさま「近代化」あるいは、経済活動の発展度といった度合でもって異文化を切ってしまう。インドにはすばらしい古代文明も現在の文化もあるのですが、それを理解しようとするよりは、インドは植民地になって、しかも非常に近代化が遅れているというのでまともに相手にしないとか、劣ったものとして見るという態度がずっと続いてきました。日本には仏教など世界的な文化がインドから伝わって来ました。また深遠なインド哲学も零を発見したインド論理学もあるわけですが、日本には、過去の大文明のインドと現在のインドというものに対する両極端なアプローチがあって、オリエンタリズム的な態度もそこにははっきりと投影されていると言えます。それがここ数年バンガロールなどのコンピューター・ハイテク技術者がアメリカで重用されていて、インド人ハイテク技術者の地位が高まるのと同時にインド見直しの気運が少し出てきました。これを機会に異文化としてのインドをもっと正面から理解しようとする動きが出てくれば素晴らしいことでしょう。

それとともに最近になってようやく日本にもアジアのいろいろな現代文化に対する関心が生まれてきました。インドは、製作本数でいえば世界最大の映画大国なのです。日本にはこれまでごく一部のインド映画しか入ってこなかったのですが、大衆的な娯楽映画が徐々に入ってくるようになって、少しずつインド映画に対する見方が変わってきているとは思いますが。

その理由のひとつは、日本が豊かになって、欧・米の「先進」文化をモデルとして見るというだけでなく、余裕をもっていろいろな文化を見る、あるいは捉えようとするような関心が生まれてきたからではないかと思えます。

そして文化の相対化も認識されてきました。絶対的に西欧文化優位ということはありませんし、絶対的なアメリカ文化優勢ということもありえない。日本の文化も世界にいろいろな面で行き渡っていますし、そういう中で世界の多様な文化についての関心が出てきたと思えます。

しかし、依然として異文化に対する偏見が根強くあることも認めなくてはなりません。たとえば、アメリカ文化に対しても深い理解があるとは言えないでしょう。アメリカの服装を例にとってみると、アメリカ人はラフな格好で万事通するようなイメージを思い描く傾向があります。ひところアメリカへ行くならば、服装に気づかうことはない、ジーンズとTシャツだけで十分じゃないかと言う人も多かったのですが、実はアメリカ社会は服装が非常に重要なところなのです。昼間はジーンズでも、夕方になったらフォーマルな格好をすることが多いし、服装の社会的な表示としての意識では、ヨーロッパよりも強いところもあるくらいです。だから、ビジネススーツとか、ビジネスで成功する服装とか、服装がパワーを持つとか、その種の本が多数出版されています。

私も初めてアメリカで生活したときに、服装に対してのかなり複雑な仕掛けがあるのに驚いたことがあります。大衆製品から高級製品まで全部ありますし、それを適当にうまく自分たちの生活様式に合わせながら使いこなすのが、アメリカにおけるファッションの位置づけです。

こういうことも日本で一般的になされるアメリカ文化を捉える一律な見方の中にはなかなかわからなかったわけです。アメリカで生活してみて初めてわかったことといえるでしょう。ですから、アメリカはラフで、ヨーロッパは高級という印象で、それをすべからず両者の文化全般にあてはめるような形で捉えられてきているのが、実際はそうでもないということが徐々にわかってくればいいと思うのですが、今日でもアメリカの文化と社会に対しては意外と理解が進んでいないというのが私の印象です。アメリカ人は多様な民族から形成されている国民ですから、文化も多様で一律に捉えるわけにはいかないのです。それと、そういう社会では逆に服装や態度といった外見的

なことが大きな意味をもつことも理解しなければなりません。

80年代にはアメリカや西ヨーロッパで日本に対して「日本異質論」というのがありましたが、日本の政治、経済システムが違うというだけではなくて、文化が違う価値観も違うとあって、日本は欧・米の基準から見て「異質」な文化と社会の国だと捉えられたわけです。いわゆるジャパン・バッシングといわれた現象の背後には、西欧社会の日本文化に対する偏見のようなものがないとは言えないでしょう。

「異質」といったときには、そこには侮蔑的な感情が入っていて、ジャパン・バッシングをするアメリカ人の立場に合わせて、日本は西欧やアメリカとは違うといったイメージが作られてしまう。しかも劣った悪い意味でのイメージです。そこには日本にはさまざまな面があっても、劣った逸脱したという面で見たいという人たちの気持ちが強く働いていることになります。世界に経済的な攻勢をかけてのさばる日本をこらしめてやれ、脅してやれといった気持ちです。ヨーロッパやアメリカだけでなく日本の発展を快く思わない人は世界に多いわけですから。しかし、「日本異質論」の発信地はアメリカ、そして西ヨーロッパでした。となるとそこには一種のオリエンタリズム的なものを感じざるをえません。しかし、そこには日本人の態度もやはり反映されていることもあったかと思えます。これもまた注意する必要があります。金持ち日本はお金で何でも動かせると思われた節があるからです。

また匂いというものも、オリエンタリズム的な異文化に対するアプローチの大きな要素となります。かつてアメリカ政府の高官が、日本人は魚の匂いがするから嫌いだ、ということを行ったというまことしやかな噂が流されたことがありました。嘘か本当かは分かりませんが、そういういい方はアメリカで非常に侮蔑的な言葉なのですが、匂いが偏見の基になることも多いのです。肌の色なども大きな要因になっていますけれど、匂いといったかなり文化的なものでも差別の対象になります。

アジアでも、匂いの問題では日本人には耐えられないことがたくさんあります。私の経験でいうとスリランカで汽車に乗ると大変だと感じたのは、ある時便所があふれてその臭いが車内一杯にただよってしまったことでした。しかも、外では雨が降って窓を全部閉め切って走らねばならず、しかも暑いところなのでその臭いのすごさに危うく失神しかけたことがあります。これは私個人のことでなく数人一緒にいた日本人みんなに共通することでした。周りのスリランカの人たちはまったく平気でした。匂いに対する感覚が日本人とスリランカ人とでは大きく異なるのです。

そういうことを体験すると、文化全体に対してこれは汚いと考えてしまう傾向が出てきます。文化の他の面ではさまざまな美しい要素もあるのに、一つのことがすべてになって異文化を見てしまいます。

それから色彩も大きな要因となります。赤色というのは、ロシアでは聖なる色です。赤軍といっても、日本の赤軍と向こうの赤軍では意味が全然違います。黄色はタイでは仏教の色、僧侶の衣の色で聖なる色です。日本ではむしろ交通信号の黄ではありませんが、警戒すべき色に属するでしょう。赤もそうではないでしょうか。異文化に対する偏見の生まれる要素はどこに潜んでいるかわからないのです。憧れると同時に相手を侮蔑する。そうすることによって人間は生きていくというような側面があることは事実だと思います。

その偏見には、政治的な野心とか、経済的な願望とか、そういう利害関係ももちろんからんでくると同時に、政治や経済や軍事において逆に優位にある民族や社会に対して、劣位におかれていた人が文化的な優越性をもって相手を見返すということもあるわけです。黒人の文化というのは差別

サンプル

の対象のようにずっと捉えられていた面があるわけですが、ブラックパワーと言い出して、生命力では白人より黒人のほうが強いという主張を黒人がして白人を見下すこともあるわけです。それは白人の優越感の裏がえしでもあります。白人、黒人といったいい方も乱暴ないい方にはちがいません。日本人などは黄色人といわれますが、これも現実に私たちは黄色ではありません。人間にはさまざまに見えるところがあり、肌の色も微妙にちがう面が多いわけです。現にフランスでスペイン人に間違われたとか、アメリカでメキシコ人として扱われたとか、日本人と外国でなかなか見えてくれないような体験をする人もいるわけです。白人、黒人、黄色人といった区別も文化的な偏見の面が強いと思います。

異文化に対してはささいなことが拡大されて、オリエンタリズム的なアプローチを生み出します。サイドは、学者や小説家の言説だけではなく、十九世紀イギリスの政治家の議会演説なども引用しながらそこに含まれるオリエンタリズムを露わにしてゆくのですが、日本人のアジアに対する言説を明治以来拾ってみれば、同じようなことが言えるかもしれません。福沢諭吉の「脱亜入欧」は近代日本の国家的スローガンにもなりましたが、福沢には強い「アジア蔑視」があったと安川寿之輔氏は指摘しています。私も以前そのようなことを述べたことがあります。無意識的に発言された言葉が誤解を拡大させて、それが大きな国際関係まで脅かす可能性があるということです。

いつも感じることで、先にも指摘しましたが、日本人はどれも自己完結的というのか、外来文化を日本文化の中で消化しようとしてしまう。外から伝わった文化の要素でもいつのまにか日本文化になってしまっているということが多く、それで、逆に異文化をあまり意識しないのではないのでしょうか。異文化に対する憧れも軽蔑もあるのですが、日常生活の中で異文化に対する無関心というものが、いかに大きな誤解とか差別とか、逆に外国での日本に対する悪感情を生むかということを意識しないで行動している場合が多いと思います。

オリエンタリズムは、オリエン特に対する近代西欧の偏見、偏向というものを、西欧のオリエン特支配の生み出した言説としてサイドが告発したところからきているわけですが、これまで見てきましたように大きな意味で異文化に対する偏見を示す象徴的な言葉として使えると思います。単に西欧対オリエン特という形でなくて、日本対アジアとか、アメリカ対中国や日本というような形でも使えるし、西ヨーロッパ対日本という形でもあてはめられると思います。それはアジアやアフリカのさまざまな地域でも多数派民族から少数派民族を見る場合とか、複雑な異文化間の状況において使われることでもあるでしょう。

なぜオリエンタリズムの問題がそれほど重要かといえ、現代は文化と人間の広い交流の時代だからです。幾度も繰り返しますが、異文化は常に身近にあるし、常に他者と接触しつつ人々は生活をしていかなくはなりません。そのときに、異文化に対してあまりにも無知であったり、また無知からくる偏見は大きな困難や摩擦を生み出します。

異文化理解が重要になった時代に、異文化へのアプローチに対する警告の言葉として、「オリエンタリズム」というのは非常に重要な言葉だということを指摘しておきたいと思います。

(青木 保『異文化理解』岩波新書)

\* 言説…ものの言い方

## 設問

### 問い1

近代日本のアジア諸国に対する「オリエンタリズム」と、西欧社会の日本に対する「オリエンタリズム」について、筆者の考えを100字以内で説明しなさい。

サンプル

### 問い2

傍線部「異文化理解が重要になった時代に、異文化へのアプローチに対する警告の言葉として、「オリエンタリズム」というのは非常に重要な言葉だ」とあるが、筆者は「オリエンタリズム」とはどのような意味の言葉で、どうして現代に必要だと考えているのか。200字以内で説明しなさい。